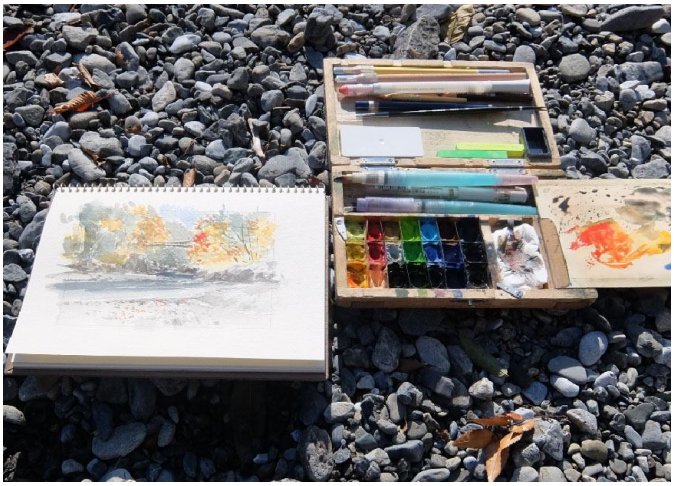
「日々の理科」（第 1243 号） 2017（H29）,12,-1

「奥多摩自然観察会（４）」

お茶の水女子大学附属小学校　田中　千尋

多摩川の河原に降りて、自然観察会が準備してくれた駅弁を食べたあと、私はさっそくスケッチをした。一応水彩画の講師なので、率先して風景を描かなくては！と、思ったからだ。生徒さんはさっそく、私を取り囲んで描く様子を「見学」していた。



これが河原の石の上に置いた、スケッチブックと絵のセットである。このほかに私は折りたたみの椅子も持参していたので、ゴツゴツした河原の石の上でも楽に描くことができた。

奥多摩の河原の石はすばらしい。さすがにセメント原料の産地だけあって、石灰岩の転石が圧倒的に多い。そのほかにも、ホルンフェルス、黒雲母片岩、石墨片岩、緑色片岩、大理石などが見られた。変成岩が多い。こういう河原で岩石の名称がわかると楽しい。「落ちている石には一つひとつ名前がついている」と教えたら、学生さんはとても驚いていた。

お弁当を食べた場所は、多摩川本流に日原川（にっぱらがわ）が合流する地点だった。写真で右側から流れ込んでいるのが日原川である。見た目ではどちらも同じぐらいの流量に見えるが、日原川のほうが支流だ。

沢登りをしていて、川が二手に分かれる時、どちらが「本流」かを迷うことがある。この場合、右股と左股の水量で決定し、ルートマップでは 2:1 とか 1:3 と記載されている。この合流点では、多摩川本流が「左股」、日原川が「右股」で、目測の流量比は 3:2 ぐらいに見えた。

上図が、多摩川本流と日原川の合流点付近の地形図である。左下から大きく蛇行して右上に流れているのが「多摩川本流」、北から合流しているのが「日原川」である。スケッチをしたのは「ジ」の文字のあたりだ。

奥多摩の市街地は、二つの川の合流点の河岸段丘上にへばりつくように発達したことがわかる。土地は狭く、奥多摩駅もホームがカーブしている。奥多摩町役場も日原川の崖上にあり、建物も断崖上に大きくせり出すように建てられている。